

「災害から考えるおとなの責任」

園長 鈴木 勝子

キンモクセイの甘い香りがあちらこちらで漂い、木々の葉の色が変わり始め、いつの間にか季節はすっかりと秋模様になってきました。十月は台風や発達した低気圧によって、関東から東北にかけて広い範囲で記録的な大雨に見舞われ、川の氾濫や土砂災害で多くの命が奪われました。また、家屋の倒壊等で住む場所も奪われて避難所での生活を余儀なくされている方々もたくさんいらっしゃいます。大変な被害に遭われた方々に心よりお見舞いを申し上げます。また、東海地域への上陸が予想された台風十九号では土曜日保育と重なり、子どもさんの安全確保、保護者の皆さまの送迎時の安全、職員の安全を考慮して、ご家庭での保育のご協力をいただくことが出来ました。心より感謝申し上げます。今年の台風二十四号では、浜松市を中心に大規模な停電に見舞われました。長いところでは一週間近く停電した地域もあったようです。その記憶も新しい中、今回の台風では飲料水の確保や備蓄食料等の非常用品をどこのお宅でも準備されたのではないのでしょうか。「備えあれば憂いなし」ですね。

さて、皆さまご存知のように、当園は周辺を田んぼに囲まれ、今回のような大雨の場合、近くの川の氾濫も想定されます。そのため、年に数回は水害を想定しての避難訓練を行っています。新園舎で生活している4・5歳児は2階に上がり、テラスを通ってりす組に避難します。2・3歳児は事務所の前を通って2階に上がります。被災地の映像や写真から、万が一の場合は、ある程度の年齢の子ども達には「自分の命は自分で守る」ことを教える必要性を感じます。

猛暑や海面温度の上昇や豪雨等の地球温暖化による影響を身近に感じずにはられません。九月の終わりにスウェーデンの十六歳の少女、グレタ・トゥンベリさんが『国連気象行動サミット』で「大絶滅を前にしているというのに、あなたたちはお金の事と経済発展がいつまで続くというおとぎ話ばかり」「私はあなたたちを絶対に許さない」と私たちおとなに対する不信感と怒りをあらわに、堂々とスピーチする様子が報道され、大きな反響を呼んでいました。このスピーチは、今、目の前にいる子ども達の声を代弁してくれているのかもしれない。私たちおとなはこれから何をしたらよいのかと考えさせられました。

ご報告：十月二十一日（月）に聖隷こども園ひかりの子(旧ひかりの子保育園)を創設された故平野健二さんの奥様の鈴子さんが九十二歳で天に召されました。健二さん、鈴子さんご夫妻は、共働きで育児に大変苦労され、地域の方も子どもの預け先が無く困っている現状を知り、私財を投げ売って「職員と子ども達とで大きな家族を作りたい」「働くお母さんが安心して子どもを預けられる場になるよう、また小さい頃から信仰をもって大きく育てほしい」そんな願いを込められてひかりの子保育園を設立されました。先日、職員会議の場でひかりの子の原点・初心を職員間で確認・共有し、気持ちを新たにいたしました。